孫子兵法

三

2501
10-3

北郭芳

遠
2501
10-3

阿也可忍譚巻之三

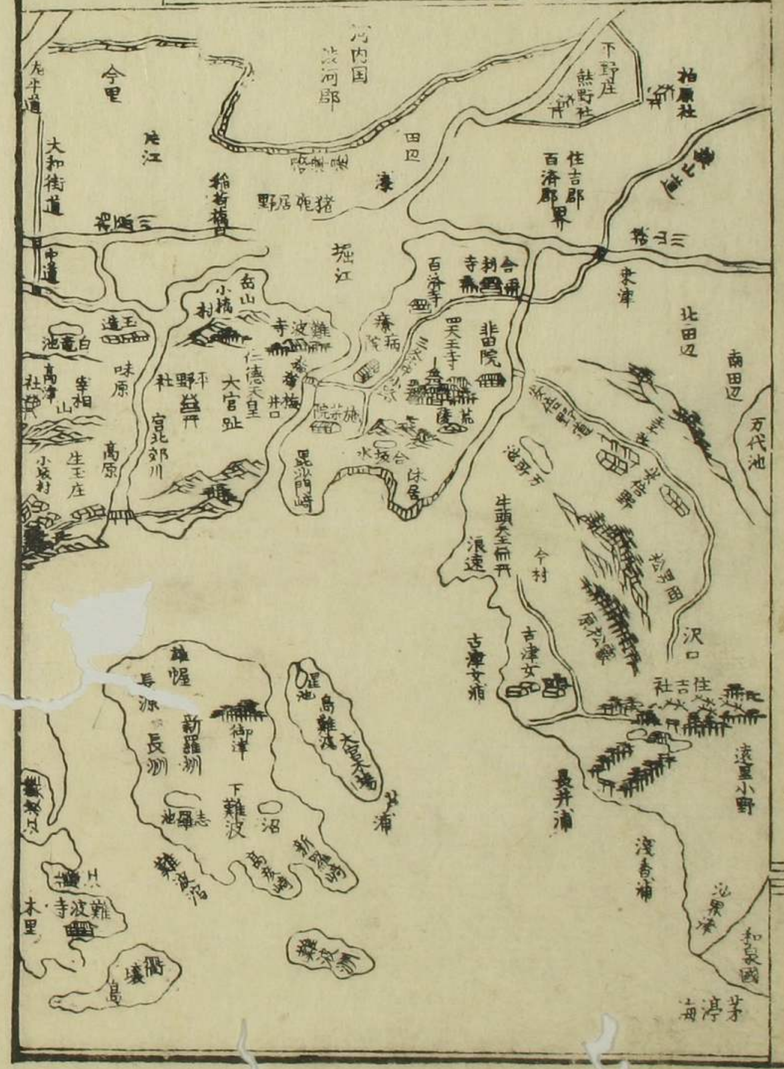
法橋玉山戯作併画

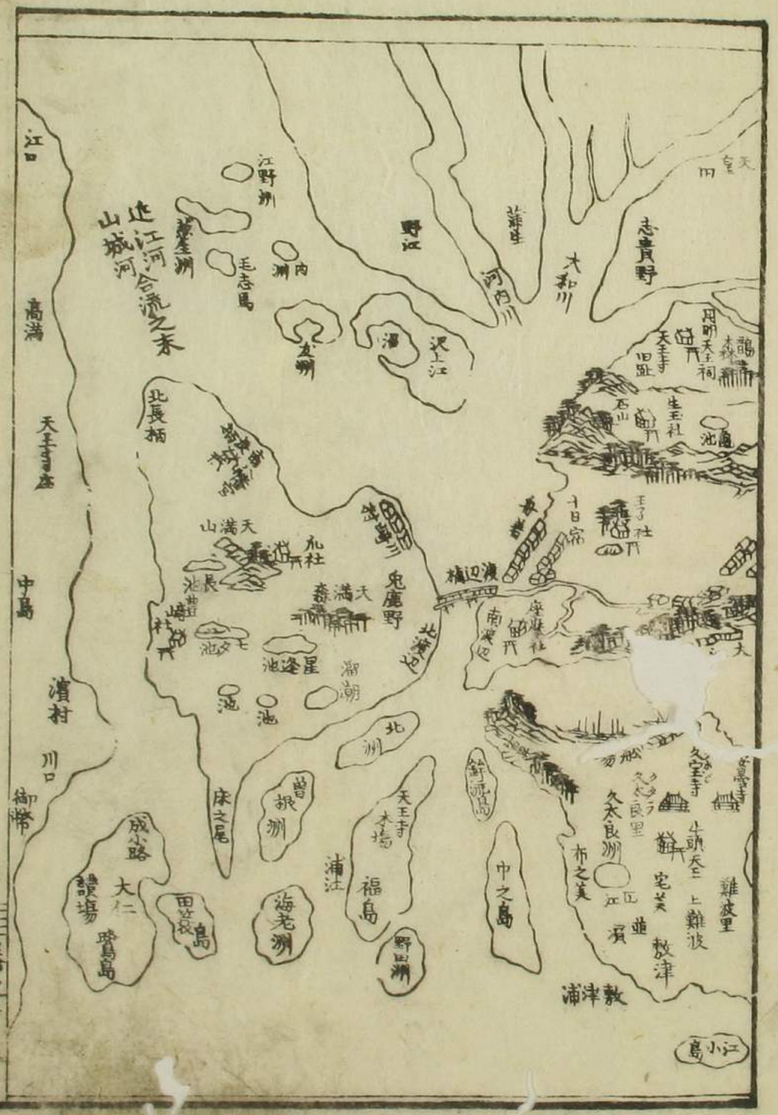
豊子安奈閑を越ふ物語

偖も安倍野の安奈ハ。豊子姫を轎ゆのくしめ。法守社屋形を出くり。安倍堅の邑を過んハ。人の多き人もらし泡めくしくく。霞松原と斜ふ古津女の浦を濱ぢくいく。今村を猛堀江河を

くり。四天王寺のいまある。施薬院療病院の中間。

村上冷泉圓融花山芋之御代摂州難波之圖





三條中の小路といふ所より佛麻呂と呼る翁あり。
ふるさとの人なつかしく思ひて許より舟掛をこ
ぐ。夜とあらし。翌るあしたまだ東雲のころ
其所を出る。大江山岸。ひろの原のうしろを渡て。
兎鹿野郡の川崎村長柄の里江口高瀦の駅をすぎて。
三島江に着ぬ。此處より店を構へ清なる酒肆あり
あるじ安奈檜の下に輔をおろし。机床に腰をかけ。
濁醪清酒輔夫の者に飲ませ。まづ酒好まるゝ

もろこしより渡りし少人。旅の労をとゝ
もろこしまるに最前より此所に居る男
あるじ安奈をかこみ。完尓と笑ひ安奈も
會譯して多くの人すゝめ見るに面白く誰も
出さじと出ぬ。されども顔のいろ。髯のあるとなく。
何となく人をして人をして躊躇せんと得うねるに彼
男聲をあげ。ものもいはず此一所に来ませしこの
悪古南門が主従の者なり。実業の仕事を拵し奈

むるこゝ高厳し、由断しく傳よなりまふるゝ、
ふて、安奈けづゝおりの出しうり、是なん伝さの
森まゝく、敵をゝゝゝ之豊子をうゝみ書ゝゝし奴隷
ゝゝり、林を下ゝく礼をなし、徐やゝしなの急雑、既
て身命を失ふ所ゝゝしを、おすはゝゝゝ呈下の働
ゝよゝゝ、危ふゝ命清ゝ孫ゝゝて、何慶いのなる
人、何のゝしゝあゝゝ。白刃ゝく戰ふ中ゝゝ、
ゝ殺し出しゝふやとゝふる往ゝ隷ゝ笑ひゝ。

系素姓ゝゝハ君等の身のゝゝし、愛東なし。此
三島江の関、先ゝ山崎社開ありいづれも西右衛門
父子ゝ的の人夫をゝせ置、往還の旅人をゝゝ。
ゝゝゝ出ゝゝ女の美ゝゝ者ゝゝれば、先捕ゝ置て
和泉へ遣ゝゝを紀ゝゝ後ゝゝゝ関ゝ。
いゝゝゝゝ此二所の関を越ゝ、京師ゝ入ゝ
ゝひゝゝ、安奈ゝゝて大ゝ驚ゝ、多ゝふ結構ゝ
ゝハ梦ゝゝ、ゝび、尋常の道を往ゝゝて、此所

豊子安奈三島の廟を越ル
卷之三
五

はゞかりなくうち扣何〳〵此関を越るゝやうに狼狽
やうなる奴隷大ゝに打笑ひ僕の妻よりも際ハ何ゝに
ゝしび露もかゝるゝしたる及ぶし快〳〵関を通し
まゝ〳〵其〳〵無〳〵用意や走ゝる久竹杖と弁皮笠
をとり出し竹輿の簾をあげ〳〵四方の豊なる貴望を
被ふうゝ竹杖を握〳〵赤懐より青布の帽子を
とり出し〳〵安奈が頭をつゝ扣ハ〳〵ハ急〳〵
関所を通るゝ扣ハ寺人勢を改ふ打

を咎めるハ汝身咎〳〵宣べし是ハ僕が老母の病牽
〳〵を京より見しるゝ壁〳〵往ゝあゝべ班彼より
通ゝせまゝと咎〳〵轎の簾を揚〳〵とゝるゝ伺ひ
子細もゝひ〳〵ふまゝ〳〵と安奈ゝゝ恐ぬ顔も
〳〵てゝゝや多〳〵を嘲哢〳〵ハあゝべや此豊子
姫〳〵ハゆゝ破瓜よるゝべ況や鹽蕪ゝ女郎と老
母なりと偽云〳〵関ゝいでゝ賊ゝや返て往
等を怒〳〵〳〵ゝ難儀を歎ゝし此時奴

隷眼を見出し、殿を励し、あれ興あるべく、若輩
を嘲るなし、まんや、冀も関をおぼ通はしし拒
さえたんを、冀を別よ通るべと手術いるもろ。
ん劉く僕が冀よ隨ひ、えとをもるべし。安奈も豊子
もまるよんまく落着ねぐ。外よ拒ぶとをるも
なく、前よ此奴隷ね奇怪なる働をるをはるへ。是
もやといふる不思議のありやきん。もるくこと
冀よ隨ひ、乗輿を後従く二町許りよ。

関所あり。閘門巍然うまんなし。守ま武夫ちべく
百人餘を、監主ハ素袍のるを腹巻し、門兵ハひと
物の具して、得ものを取く兼ねるで、容易通る愛ふ
もおぼえざれど、安奈胸もどりんおそれいぐハせんと
奴隷が顔をそれば目まぜ〜〜をやゆけと令の怪て
も閘をよ微し礼なし通〜んとするを、武士等
聲高く罵く。やおき老人行轎の四ハ何者なるぞ。
の閘所なるをいるのるちの不礼ハなりぐ。

下よりと嘖々ゝ。安奈氣を老人と呼るゝあり
くれど。恭しく役署の前よ礼をなし。是ハ年老ゝ
母ゝ。みゝ壁あり。奉ゝ。あられ此侍よりと
させまくとらんを。聞守聞ゝ。汝ゝ腰こゞまり。歯ハ
りぬゝ先奉ゝ。つまゝ親のあゝ母ゝ。虚
云まゝゝ曲すなれ。岳士等ゝ。ひとゞり出せ
申と怒ゝ。安奈ハすゝ聞ゝのひとゝもん
得ねゞ。いゝしの詭ゝ。ゝんまゝ。轎の際

ゝ立ゝ。爰ハ弓社聞所ゝ。付ゝへゝ。ゝゝ下ゝ。あ
ゆゝ。簾を。さゝげゝとゝゝ。豊子姫をいゞ
なし出ゝ。今やいゝる憂めよ逐ゝむとゝハゝ
ゝ。多のまし見の蹈所をもゝゝゝゝ。聞
守豊子姫ゝゝゝ。あゝあゝはしいくゞくの
年を積ゝ。かゞゝいゝ老ゝゝ。轎よふあ
しゝゝゝ理りなり。下ゝゝ及ゞし更ゝとゝ
申ゝいゝよ。安奈瞻潰ゝゝしいんゝなゝこハ有

鵜飼の農夫豊子を追ふ

雛しと。豊る姫を輦へおいれ。簾引おろし。虎の尾を踊こうして。奔る閑所を打過る。扨三町ばかり急ぎ〳〵ゐもすこしいたぼうちうとうとうとうとうとう彼奴隷ハ沖處へけしやうとうとうぬ安奈いよく驚き此奴隷の霊異なるかも人まてハあるべうとうとうとう是ハ天狗などゝ思ふ。家を助る仕業ゆゑ。おう強しくも嬉しく〳〵。此書頭中ハ。おのゝ多れ隠も簑あの竹皮笠を。豊る姫のうゝ。ありけ傳よい

姿ハ。ゆゝ〳〵。いく〳〵。老ぼゝ。ゆゝ〳〵。ゆゝ。せを。おのゝ多の護。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ

角立て、此書男まさぐ頬髯も生ぬ若き分にて、先
夫呼ばれて玉うしろに酴醾ざけよろしく醉て、おの
ゞ儘に倒れてるるものなれば、いで酒のちからを醒して
ちからと、大手をひろげて飛うほと、脚夫の輿惣動
平愕て、さて歩間よ、安奈あるふ鳥して扱はれ
かくれ笠隠れしまも所まもりて、驗のなきまもて、
捨て走りを、牛飼て嘘を咲し、此狂人よ哮
きて、短き日蔭のなければ、ぶつぶつ言

遠しいさはり轎のまもれをまもて、豊子をまもて、こハ
艶なる女郎、なるまもいまもて何のおもし生
る気色にて、牛迎えて逸足にて急さまり
なわ豊子ハ人もこなし、安奈を呼ひて今の形勢
まもハ、此前なる山崎の湖をぐいて通るべき小
安ぐるひまもて、安奈慰めいふ、家ゞ みゞるまもて
所まもハ、もまもて前の奴隷のあまもれまもあくらや
まもまもハ、はまもぐ、りの前まもたのまもあまもさまもの

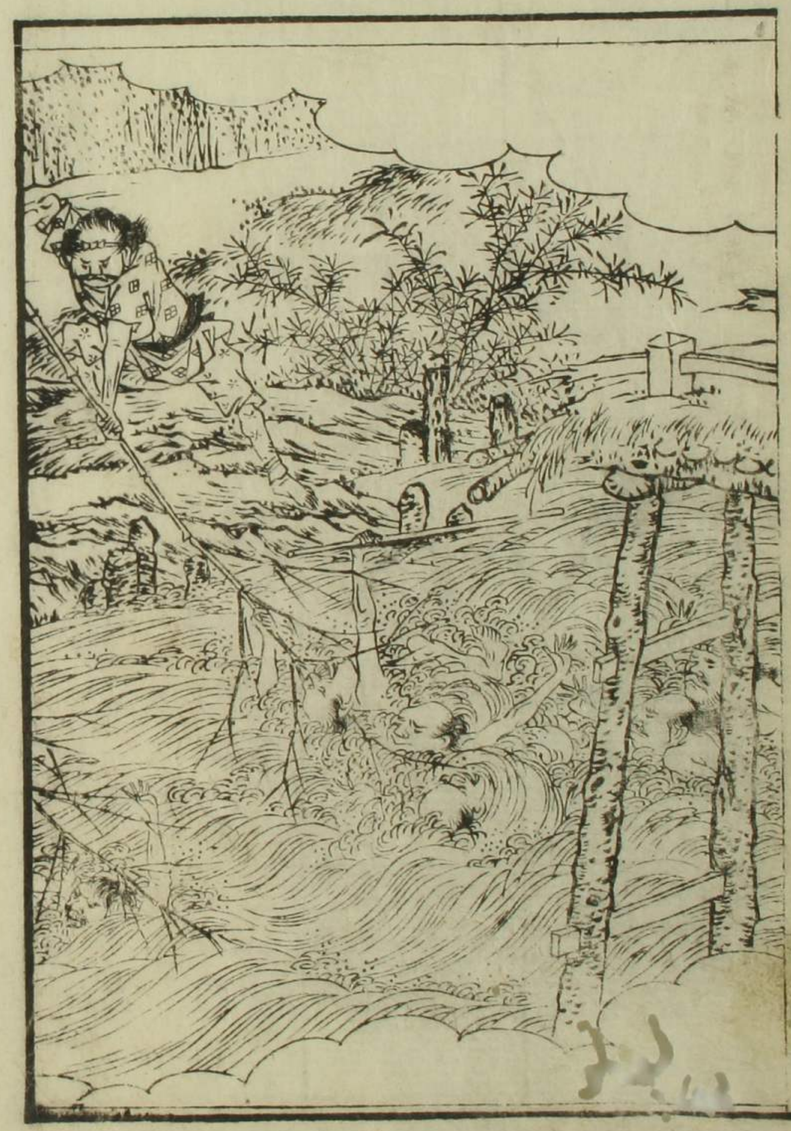
倦びまのそこ〳〵。古曾部橋井の宿をもるる〳〵山崎
ちう〳〵急ぎ〳〵。偖もうたの牛飼ハ悪右衛門が又擂治
右夫が領地。鴉殿の里ゟ農民なるが豊子安奈子似
〳〵人者と〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵人逃〳〵ゟもあれ。捕え誅ゟ
屋しゟゟも其人〳〵あ〳〵ハ逃ゟの褒美せと。皆
ゟり里中へゟれ〳〵ゟれば。あゟれ拵〳〵ゟ〳〵得つき
なんと。往来旅人ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ打ゟし。此二人の為人を
疑ゟべ〳〵もなくと其人なんゟと。迫〳〵ゟゟ乃

農夫二十人斗。うゟ〳〵ゟ。捧ちぎり木。多〳〵ゟひつ拵。
山崎街道を真一文字ゟ。跡を去〳〵て追〳〵ゟ〳〵輪
夫の両人ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ。あ拵ハ後あを。汐ゟ
多〳〵の人夫の馳まゟハ必若茅をとゟ〳〵人為の追
人なゟ〳〵し。自己両人此所ゟ居〳〵防〳〵べきゟ。女郎
を多〳〵て。一旦も留〳〵去ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ。安奈驚こ
なゟ〳〵。まゟ豊子を脅ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ。ゟ〳〵ゟハ系〳〵
乙女ゟ〳〵ゟ。将いのゟをゟしなゟ〳〵ゟ。是ゟ前世

り定つし因縁まことふしんをあらしめ足の限り
で走まる。扨も與惣勘平の二人こうひくしく水を
瀬河の板橋三間まうおし。敵ハ大勢此方ハ二人用意
なくしハ防ぎがたし。傍なる藪の中より竹のまごろ
あらを切りくびくびくび幹を斜よりぶ寛竟の長
戟まりと携て。河岸より生簀てゝる。楡柳の内より伏く
追まる敵を待うけるとあらぶるはやまる農夫。
川端りませ著しが。板橋落ゝ。岸うも水うしし

りうり紫内まつる農夫なれば。橋のおちうを殊る
せば。中り一人合ゝいふ橋うり下ハ水深ゝ。愛を
渡をしいうぶよ。系者ゝ衣を脱ゝ裸り
なり。渦巻ゝる河川を馮ぶゝ。與惣勘平
両人ハ。敵の河岸ちゝうをを登し。堤の上り
あゝれ出。うう敵竹の長戟を取ゝ。頬も胸もと
らいあゝ。ぐよ突立ゝ。川中ゝ。おりい
ちぶうゝなれば。先よ進ゝ壮夫眼を貫れ尻居り

與惣勘平水無瀬川ニ敵を防ぐ



ころび倒れ、白浪こしてしぶき、水の手たゆ
く流れ落ち、行衛もきびしうして、是をこそ
農夫等大ぜいあつまれあとをしたひしを
を与惣勢得こそ、あつまり、多くつどひ
まりよさしもの大勢こそもやがて原の岸よあひ
帰されこハ口惜しと拳を握り、中より一人群を離
こしまつ、彼徒ハ公の命令をこそ、
山崎こそ人こそを、汝両人搦をこそ、乃

殺戮をこそ、既に一人を殺し、彼こそ傷をこうむ
らむこそ、いかる所行ぞや、もはや退く妨なば
ハ、ハ儘こそたるまじ、たゆこそ弱くハ、官所よ
訟捕こそ、帝こそ罪こそ所きこはあるしいこそやいこそ
ゆゆしき興惣勢を大ぜいよこそ、さこそ汝ハ先こそ
牛を奪まこそ、彼を滑田の中へ倒しこそおれ
なばや、今彼こそ河をこそ、彼こそをこそ、二人こ
をこそ、こんこそれども、こそ二方ハ山崎を越

く。都ちかく入たまへ。用あるとなり。二なき命を失
うんとす。まし。ゆゆしく。四苏草うち分れ業を勤めるゆ
ゑんげよ罵り。悪さ輙夫が雑言あれ。あれ舌抜く。此
報おりゐ去らせたまふ。二十餘人を三隊に分
ち。三所より。でうでうく。與惣勢は河岸よりあり来る。
波を渉じて働く。防ぐハ二人。波ちハ三所。此手を突ハ
彼方へ進む。右を防ハ左へ波。猛あく岸へ着く
とゝしが。ひとし上へ。後前よりとゝ渉し。

間あく討く戦ふ。敵ハ大勢。こゝあゝ所ともあ
らざれば。與惣勢はまちうをあるを一方を突き渉し。山
崎れ方へ逃行を。遁じ人ほゞし追ふ。あるハ戦ひ且
ハ去ほ此時安奈ハ既う山崎ちゝ逃のひしが後よハ
追人の来あり。前ゝ闇の固あり。容易通ほ
ゝ手術もなく。進退此よりぬ時う烏帽子
狩衣着る神人二人。白木の唐箕五を荷せ
嗜めゝゆゝあり。支唐箕う。加茂別雷神相嘗之

御供米し記しるし。安奈是を見て。別雷の神社
ハ。西しゝ上加茂の社なり。此ゝ遊まつのすがた
奇遇なりとおもひ。神人を向ひかゝ。ハ。
加茂の神官保憲の弟よ居たる人ゝ。ハ。
ゝどつし。問ハ。丈人答ゝ。宣よゝ。ゝ。保憲が家
族なり。水無瀬の里より捧ぎ来る御供米を集
ゝ。都よりかゝ。何の故ゝ。保憲を問せ
給ふしるし。安奈大ゝにまろび。津の國住吉ゝ神

宮國量ゝ消息此ゝよあり。新上萬ハ保憲の甥ゝ殿ゝ
狭の國よ居たる。二郎高保の若ゝ北の方。和泉の守
清原の春雄が息女豊子の前ゝ。今雅を
避ゝ京師よ登る。保憲の若よ宮ゝ事を講ず。
失ゝ金烏玉兎集と探し出し。再び清原の家
を起し。ゝ二郎の若ゝ配偶しゝ。
見しゝ。後ゝハ追人の来る。前ゝ出
あゝ美目ゝ女をゝ。災害ゝよ迫ア。

噴出志

加茂の神人芽豆子を殺す

浮屠こゝに遁れ隠れなし。今ハ茅ヶ屋所ゝ見えまいらせ
ぬるハ。加茂住吉の御神神のかゝらしあらし護らせ給ふ
なるゝ。いかゝも計らるゝ。此関を越させまへとい
ふ。神人ハ大ぶん驚き。奚ぞや和泉社清原の家乱
れ。二郎の主も。お國の狭へ。こゝろ寄せしゝ
り。此上鶴ゝ。春雄君の息女ゝ。おらしまつる。ゆゝ
妻なるゝ。此唐櫃の中。二ツハ空ゝ。あるゝ。名茅野
ゝを隠しゝ。せたゝ。神慮あゝ。いゝ

ゝ。いゝの給ふ。豊ゝ。いゝ
今ゝ。安奈と思ゝ。神人二人後前をゝ。
関所ゝ。ゝ。蘭寺ゝ。ゝ。ゝ式礼ゝ。蘭門
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ蘭所を過ゝ。京師をゝ
ゝ。ゝ。ゝ。

中よりといふ。樹よりのぐり。梢をつたつて猿のごとく。終
り行方をしらしなしと。山の尾より大山峙を山越りし
ゆくへ。京の方へ登りぬる。与惣いりし大和の國北屋
ぬしの川の殘士ゆくあるじ。わかよ。水情をしらず紅
葉ちる。あまは幼稚より。飛淳山の仙人をまのあたり。樹を攀
山を登りうこ。蛇をひよ異なるこゝあり。扨ぞうこ
舍はいとしきかな

阿也可志譚巻之三終

北邨芳

凡士農工商とも夫くの職分家業に因て持用乃品物城廓を今目
営む事世上一般也然るに近世富士繪本の巻中に聊か白紙
あるを種々の書入又は形さへ覚束なきを偶或は男女
陰躰をえがき君臣父子の中に面を赤くし合事間に多
是等を必竟一例の無よ業とて乃戯きのうんの併其職分
の道具へ無分のハ僻ゆ著述拙く筆者の誤りに
で只言語を以て共過失免巻中への戯墨無書ハ許しまつと
請ひ侍るも法度の見にくき紀あきと保せく難錯の僥倖
と拙き筆をて祈る事爾

明治

北邨屋識